

『坂東本・教行信証』が問いかけること

三木 彰 円 (専任講師・真宗学)

2004年11月、京都国立博物館で「坂東本」の特別展覧が行われた。この展覧は2003年7月から行われた修理の完了を記念したものである。同時期、東本願寺においても修理完了までの経緯を報告するパネル展が開催された。この修理に関わってきた私にとって、いずれの展覧も非常に印象深いものであった。

『顕浄土真実教行証文類』(『教行信証』)は、「浄土宗」の名乗りのもとに法然が独立した一宗の本義を「浄土真宗」として公開するために親鸞が撰述したものである。その『教行信証』の現存する唯一の真筆本が真宗大谷派に蔵され、「坂東本」の名で知られている。この称は、この一本が親鸞の高弟・性信を開基とする坂東報恩寺に長く伝持されてきたことに由来するものである。

坂東本は本文の大部分が親鸞60歳頃の筆で記され、それ以降最晩年に及ぶ推敲・加筆の跡を見ることができる。『教行信証』の成立時期について、先学によって様々な見解が立てられているが、坂東本はそれらを検討する上で貴重であるだけでなく、法然との値遇、そして弾圧という出来事をくぐって、親鸞が自らの生涯の全てを「顕浄土真実教行証」という一事に集約させた事実を私たちに目の当たりにさせるものである。常に同朋を憶念しつつ生きた親鸞が、いかなる課題に向き合い、いかなる思索を重ねていったのか。坂東本は親鸞、その人の息づかいまでも私たちに明らかにするものなのである。

現在にまで至る坂東本の歴史に目を向けるならば、そこに坂東本を伝持し真宗を公開することを願って生きた多くの先人たちが存在することを私たちも私たちが教えられる。



修復完了後の坂東本

坂東本は実に様々な危難をくぐってきた書物である。火災ということを取り上げてみても、報恩寺は横曾根から江戸へと寺基を移転して以降10回を超える火災に遭遇したといわれるが、その中でも1923年(大正12)の関東大震災による被災は、最も大きな危難の一つであった。当時保管に万全を期すために坂東本は浅草別院の金庫に保管されていたが、別院の堂宇は全焼したものの辛うじて坂東本は焼失を免れた。この時のことについて、『浅草本願寺史』に次のような記述がある。

九月一日の日、私は当番でありました。お朝事から詰めてゐたのです。お日中の勤行も済んで、本堂には五六十名の同行が居残り、昼からの説教を聴聞しようと、堂内のそちこちに屯ろしてゐました。そこへ突如あの大地震です。内陣へ入って見ると、須弥壇は五六寸も前方へ揺るぎ出で、宮殿は今にも倒れようとする有様です。同行からの反対がありましたが、意を決して御尊様(本尊)を安全な場所へとお出し申したのでした。大事な物は成る可く一ト所にかためて置くやうにしました。其の時の輪番は長谷

川得静さんです。輪番は、経蔵の中に大切な教行信証がしまつてある。それを外へ出せといふのでした。出せといつても、蔵の中の金庫の中に蔵つてゐるのですから出す事が出来ません。兎に角経蔵の中に入って見ると、壁土がひどく落ちてゐて、足の踏み込むことも出来ません。やうやく金庫の場所へ来ましたが、勿論出すなどといふことは出来ませんから崩れ落ちた壁土で金庫の周囲を埋め、尚上の方へも厚く被せ、水を一杯容れた桶を運んで来て其の上に乗せて置いたのでした。御本書(『教行信証』)が少しも損じなかつたのは、素より仏祖の冥祐ですが、幾分さうした事も役立つてゐたかも知れませぬ。

(佐々木大心氏談・括弧内筆者)

これに加えて、被災後、自然発火を危ぶんで金庫内の熱が冷め切るまで取り出すことをとどまったという的確な判断もあり、坂東本の焼失という最悪の事態は回避されたのである。

坂東本が、このような出来事を幾たびもくぐってきたことを思う時、今私たちが坂東本に接することができるのは、まさに僥倖としか言いようのないことである。そこにはまさに「身命をかえりみずして」親鸞の教えを伝持しようとした無数の人々が存在することに改めて気づかされる。

震災の後、坂東本は京都で保管されることとなる。しかし表紙の崩落、本紙の劣化や変

色など、熱に覆われた影響は大きく、緊急に修理を要する状態であったという。その修理に着手できたのは敗戦後のことである。1952年(昭和27)の国宝指定を経て、1954年(昭和29)には国庫補助を得て、赤松俊秀博士を中心に坂東本の全面的な修理が行われた。坂東本全体の綴じを開き本紙全てに補修補強を加え、坂東本本来の形態を復元し綴じ直すという作業の中で、赤松博士によって確認された様々な事実は、坂東本の成立を考察する上で画期的なものであった。

さらにこの修理からおよそ50年を経た2003年7月から、文化庁、京都府教育委員会、京都国立博物館の監督指導のもとに、今後の保持伝達に万全を期すための修理が行われ、冒頭に記した特別展観に至ったのである。

坂東本は早くから「宗祖御真筆本」としてその存在が知られており、江戸期には報恩寺によりたびたび開帳(展観)されていたことが『武江年表』に記録されている。また大谷派により坂東本の臨写模本が作成され、例えば香月院深励(1749-1847)が臨写本を通して坂東本に言及しつつ『教行信証』を講義することに見られるように(『広文類会誌記』)、坂東本が親鸞の思想研究において注目される状況ともなる。

このような坂東本に対する意識の高まりの中で特筆されるのは、深励の門下・丹山順芸(1785-1847)による臨写本の制作である。現在大谷大学には丹山臨写本として「真宗大学寮所蔵本」「禿庵文庫本(丹山文庫旧蔵本)」の2本が所蔵されるが、これらは坂東本の筆勢や朱書の再現など、その技術の高さと精緻さにおいて群を抜くものであり、私たちが坂東本を研究する上で、何よりも注意しなければならないものである。(多屋頼俊氏によれば、かつて図書館長の引継ぎの際、「若し、火災というような時には、第一にこの本を取り出さねばならぬ」ことが申し送られていたという。この点にも丹山臨写本の重要さの一



坂東本・行文類

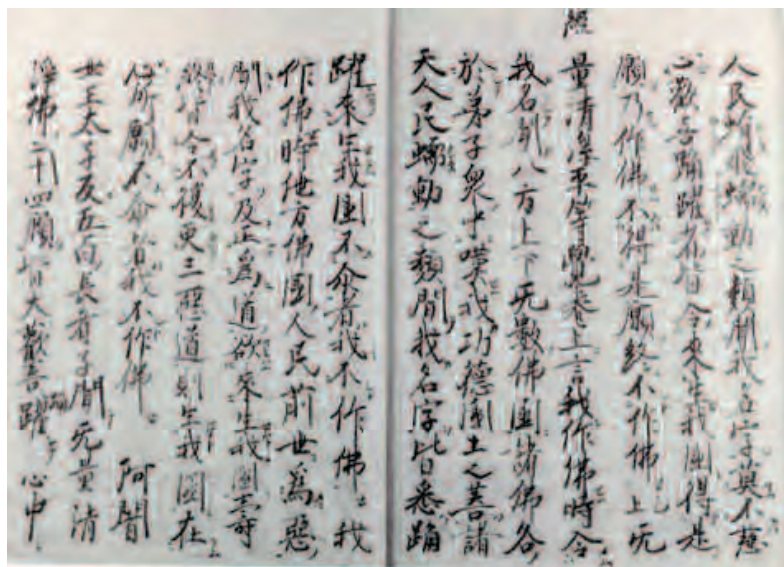
端を窺えよう。—『親鸞聖人真蹟集成』第2巻解説)

これらは、言うならば坂東本公開への取り組みの一端であるが、それが大きく結実するのは、大谷派による1922年(大正11)の坂東本の原寸大影印本の刊行である(立教開宗700年記念)。さらに1956年(昭和31)には宗祖700回御遠忌記念として再度原寸大影印本が刊行されたが、これらは坂東本の全容を公開するものであり、親鸞研究の進展に大きく寄与するものであった。

それからさらに時を経て、私たちは今改めて大きな転機を迎えようとしている。大谷派では宗祖750回御遠忌記念事業として坂東本の精細なカラー影印本刊行を企図し、2003年に行われた修理の間に撮影を行い、間もなく刊行されることとなっている。このカラー影印本の刊行によって、私たちは初めて坂東本の原本に直接する如くに親鸞を学ぶことが可能となるであろう。

坂東本に直接する如くに学ぶということは、同時にまた、坂東本の公開を願ってきた先人たちとの対話が、私たちに改めて求められるということでもある。例えば、坂東本には朱書のいくつかに褪色して判読しがたい箇所がある。その箇所を読みとろうとする時、先に述べた丹山の営為が新たな意味を持って私たちの前に浮かび上がってくることとなる。

坂東本の示す事実の厳密な確認作業と、先学たちによる判断や見解の一々についての再検証作業は、同時に坂東本を通して「愚釈親鸞」と名乗る仏弟子の姿を明らかにしていく営為でもある。私たちは改めて今、その課題に取り組み直す端緒に立たなければならない。



丹山本(禿庵文庫)